

王莽期の地方行政

紙*
屋
正
和

はしがき

一 王莽の地方行政改革

二 王莽の地方行政改革の限界

三 後漢の郡県制復活

むすび

はしがき

南陽郡新都侯国に就国していた王莽は元寿元年（前二）に京師によびもどされた。翌元寿二年に哀帝が死ぬと、王

太后（元后）は未央宮で皇帝の璽綬を手中におさめて、王莽に政治と軍事の実権をにぎらせ、大司馬に任命した。王莽にとっては成帝末期につづいて二回目の政権である。王莽は大司徒孔光らと議して中山王劉訢^{りゅうかん}を皇帝の位につけた。平帝である。これ以降、王莽の改革がはじまる。^①

元始元年（後二）正月、王莽は三公の上に太傅・太師・太保・少傅の四輔をおき、自分自身は太傅・大司馬となり、安漢公という尊号をたまり、二月には義和^{ぎわ}の官をおいている。^②元始三年（後三）夏には、車服の制度や、吏民がその身分によってしたがうべき親の扶養、葬儀、婚姻、奴婢、田宅、礼器、武具の格式について上奏し、官稷（五穀の神の社）をたて、また郡・国に学、県・道・邑・列侯国に校、郷に庠、聚に序をおくというように学校制度を整備した。安漢公王莽は元始四年（後四）に宰衡・太傅・大司馬に就任したが、同年から翌五年にかけては、長安の南郊で天神をまつり、北郊で地神をまつるという南北郊祀制や、高祖太祖廟・文帝太宗廟・武帝世宗廟にくわえて宣帝中宗廟・元帝高宗廟の五廟を不毀の廟とし、それに成帝と哀帝の廟をくわえて七廟とする天子七廟制を制定し、天子が四時を正して教化を出すという明堂や辟雍・靈台を建設している。^③

元始五年（後五）一二月に平帝が死ぬと、王莽は自らのことを臣民に摂皇帝とよばせ、祭祀の場では仮皇帝と称していたが、初始元年（八）十一月、ついに皇帝の位につき、国号を「新」とあらためたうえで、暦法を、夏正にもとづく初始元年一二月朔日を始建国元年（九）正月朔日とする殷正にあらためた。^④即位した王莽は、元始元年に設置していた四輔を始建国元年に太師・太傅・国師・国将という王莽政権独自の四輔制に改編し、三公については大司馬が

武事をつかさどり、大司徒は民事を主司し、大司空は水土の事をおさめるというように任務を区分した。そして三公の下に大司馬^{しはいん}司允・大司徒司直・大司空司若の官をおき、大司農の官名を羲和、のちに納言^{のうげん}に、大理を作士に、太常を秩宗に、大鴻臚を典樂に、少府を共工に、水衡都尉を予虞にそれぞれあらため、これらの官をあわせて九卿とするなど、中央官制を大幅に改革した。また天下の耕作地を王田、奴婢を私属と改称して、それらの売買を禁止し、所有も制限する王田制と称される土地制度を施行している。同年秋には、北方の匈奴、西方の西域諸国や西南夷の句町^{くくてい}などに使者を派遣して、たとえば「匈奴单于璽」を「新匈奴单于章」のように印綬をあらため、始建国二年（一〇）には匈奴单于を降奴服于とあらため、時期は不明であるが、高句麗を下句麗と改名している。経済・財政政策の面では、始建国元年夏と推測されるころに五均・賒貸^{しやたい}法を制定して以後、塩の専売、鉄の専売、山林水沢の税、鑄錢という各種の財政政策をうちだしてきたが、始建国二年二月に羲和魯匡の提案で酒の専売を実現し、これらを統一的・体系的財政制度の六筭^{りくかん}制として整備し、⁽⁵⁾ 商工業を統制している。貨幣制度についても大幅な改革を行なっている。前漢時代から通行していた五銖錢にくわえて、すでに居摂二年（七）に大泉五十・契刀・錯刀という三種の新貨幣を鑄造し、始建国元年には大泉五十と小泉直一の二種にあらため、翌始建国二年には六形式二八種の複雑な貨幣制度に改革し、天鳳元年（一四）には貨布・貨泉という二種の貨幣制度にしている。

このように王莽は、即位前から即位後にかけて、中央官制、南北郊祀制や天子七廟制などをふくむ礼制、学校制度、土地制度、経済・財政政策、对外政策の諸方面にわたって改革を行なった。しかし王莽の改革はこれだけではなかっ

た。以上にはあげなかったが、郡の太守を卒正・連率・大尹にかえるなど、次節で紹介するように地方行政についても多くの改革を行なっている。筆者はこれまでに、郡・国およびその守・相は前漢初期から地方支配に大きな権限をふるっていたのではなく、その時期の郡・国および守・相は行政にあまり関与しておらず、武帝中期以降に郡・国の守・相が職権を強化し、武帝期を転換期としてそれ以降の前漢後半期になってはじめて地方行政の中心的位置をしめるようになったという基本的認識のもとに、まず前漢時代の郡県支配が時代の経過にともなってどのように展開してきたのか、筆者なりの考えをのべ、^⑥ ついで前漢から後漢にかけての郡県制の展開の中で、郡・県の吏員組織はいかに変遷したのかについて検討し、^⑦ そして後漢時代の政治変動の中で郡県制はどのように位置づけられていたのか考察してきた。^⑧ ただしこの間の論述において、王莽期の地方行政に言及することはなかった。これは、後漢の郡県制は前漢後半期の郡県制をひきつぐかたちではじまっており、王莽の政治、とくに地方行政の制度が後漢の地方行政に特別な影響をおよぼすことがなかったという理解にもとづいている。現在でも、この理解に基本的な変更はないのであるが、後漢の地方行政が前漢後半期の地方行政をひきついだというのであれば、それを史料にもとづいて確認しておく必要があるし、前漢から後漢までの地方行政の展開を通観するという立場からも、王莽期の地方行政を無視したままで放置しておくわけにはいかないのであろう。こうした考えのもと、本稿では王莽期の地方行政の状況を可能なかぎりみておきたい。

一 王莽の地方行政改革

安漢公と号して宰衡・太傅・大司馬の官についた王莽は、『漢書』卷一二平帝紀によれば元始四年夏に、中央の公卿・大夫や八十一元士の官名・位次を改変・整備したほかに、一二州の名称をあらため、京師を前煇光・後丞烈二郡に分割し、郡・国の境界を再区分して存廃・改変を行なっている。⁽⁹⁾これらは王莽の最初の地方行政改革といえるが、「天下多事にして、吏紀（記）す能はず」とあるから、それなりに大規模な改革であったのであろう。しかし王莽にとってこれらは一時的な改革にすぎなかった。⁽¹⁰⁾即位後、地方行政に關してあいついで改革をくりかえすことになる。まずその改革の概要を、『漢書』卷九九王莽伝によって一覽しておこう。以下、始建国元年から天鳳三年（一六）までは『漢書』王莽伝中に、天鳳四年（一七）以降については王莽伝下によっている。

始建国元年（九）

王莽は四輔・三公・九卿・二十七大夫・八十一元士など、中央官に關する改革を行なったほかに、郡の太守の官名を大尹に、都尉を太尉に、県の令・長を宰にそれぞれあらためている。また、漢の諸侯王を全員公に降格させ、翌始建国二年にはその公の璽綬を返還させて庶民としている。⁽¹¹⁾その後、地皇元年（二〇）に、王莽の三男の王安を新遷王に、四男の王臨を統義陽王に封じたことはあるが、王莽は始建国元年の段階で基本的に郡国制を廃止し

たことになる。

始建国四年（一二一）

王莽は周の制度を参考にして、洛陽を新室の東都、常安すなわち前漢時代の長安を西都とし、全国を『書経』禹貢篇にしたがって九州とした。また周の五等爵にならった諸侯の定員、および前漢時代の関内侯に相当する附城の定員をそれぞれ一八〇〇人にきめるなど、封爵に関する改革も行なっている（後述）。

天鳳元年（一四）

王莽の地方制度に関する最も大きな改革が行なわれた。『周官』や『礼記』王制篇にしたがって、郡の太守にかえて卒正・連率・大尹の官を、都尉にかえて属令・属長の官をおいた。また三公と同格の州牧と、上大夫の位（秩二千石相当）の部監二五人をおき、部監には一人で五郡をつかさどらせることにした。また公爵の人物を州牧に、侯爵を卒正に、伯爵を連率に、子爵を属令に、男爵を属長にそれぞれ任命し、「皆な其の官を世々にせしむ」、すなわちそれぞれの官を世襲させ、五等爵の爵位のない人物を（大）尹とした。さらに西都常安（長安）城の近傍をわけて六郷とし、帥を一人ずつおき、三輔をわけて六尉郡、東都洛陽の周囲にある河東・河内・弘農・滎陽・潁川・南陽の六郡を六隊郡とし、これらの郡には太守代わりに大夫、都尉代わりに属正をおき、河南大尹は保忠信卿と改名した。また全国の郡の中で粟米を朝廷におさめる甸服の範囲にある郡を内郡、その外を近郡、郭徼（＝辺境のとりで）のある郡を辺郡と、郡をその位置によって三種類にわけた。そして全国の郡・県の境界

を再区画して一二五郡、二二〇三県とし、郡・県の三六〇に「〇〇亭」と名づけた。また郡・県の名称を頻繁に変更し、ひどい場合には五回も名称が変わったという。

天鳳四年（二七）

執法左右刺姦をおき、手分けして六尉郡・六隊郡を督察させた。前漢の刺史のようなもので、三公士とともに郡ごとに一人が従事した。

地皇二年（二二）

州牧の位を三公と同じにして懈怠している地方官を刺挙させた。さらに牧監副・秩元士・冠法冠をおいたが、これらの任務も前漢の刺史と同様であった。

以上の改革を見わたしたとき、まず目につくのは州あるいは監察に関連する改革が多いことである。まず元始四年（後四）に名称を改変された一二州を始建国四年には九州にあらためた。官制面では、天鳳元年に州牧のほかに部監二五人をおき、天鳳四年には六尉郡・六隊郡を対象として執法左右刺姦をおき、いつ設置されたのかよくわからない三公士とともに監察の任にあたらせている。また地皇二年には監察の任をおびる牧監副・秩元士・冠法冠をおいている。以上のほかに『漢書』王莽伝中には、辺郡におかれた諸將の配下の官吏や兵士が放縱であるうえに、城郭をすてた民が流亡して盜賊となっていたため、始建国三年（一一）に王莽は中郎將・繡衣執法それぞれ五五人を縁辺の大郡

に配置し、大姦猾の徒や勝手に武器をもてあそぶ者を督察させたことがみえている。これは直接には治安維持を目的にしているのであるが、辺郡の吏に対する監察の任もおびていたとみることができよう。このように機会あるごとに設置された監察官が相互にいかなる関係にあったのかよくわからないし、何重にも設置された煩雑な監察体制が有効であったのかについても疑問がのこる。現に、始建国三年に配置された中郎将・繡衣執法について

皆な便ち姦を外に為し、州・郡を撓乱（どつらん）（＝かきみだす）し、貨賂（＝賄賂）市を為し、百姓を侵漁す。

とあるのである。

郡についても目立った改革を実施している。まず始建国元年に劉氏の諸侯王を公に降格させ、翌二年には庶民におとして基本的に郡国制を廃止し、天鳳元年には郡の数を最終的に一二五郡としている。官制面では、元始四年に一時的に京師を前輝光・後承烈二郡にわけたが、始建国元年には郡の太守を大尹に、都尉を太尉に改称し、天鳳元年には太守をふたたび卒正・連率・大尹に、都尉を属令・属長にあらためたうえに、常安（長安）と洛陽を中心とする地域には六郷・六尉郡・六隊郡においてそれぞれ太守・都尉に相当する官をおき、河南大尹は保忠信卿と改名している。また『漢書』王莽伝中の始建国元年の条に、「又た諫大夫五十人を遣はして、錢を郡・国に分鑄せしむ」とあり、郡において大錢・小錢を鑄造させている。これ以後も貨幣鑄造の中心は上林三官にあったが、郡の分鑄はその後もつづくようである。⁽¹⁶⁾ そのほか天鳳元年には、公爵を州牧に、侯爵を卒正に、伯爵を連率に、子爵を属令に、男爵を属長にそれぞれ任用し、世襲としている。この世襲が文字通り実行されたのなら、郡県制という名のもとに一種の封建制が

行なわれたことになる。王莽期に廬江属令に拝された李憲が王莽末に偏將軍・廬江連率に任用された（『後漢書』伝二李憲列伝）というように、連率・属令が人事異動の対象になっているかのような事例もあるが、『漢書』・『後漢書』をみるかぎり、王莽に卒正・連率・属令・属長に任用された人物はおおむね王莽末期までその地位をたもっているようである。ただし、管見のかぎり、その地位を子供につがせたという事例は確認できない。

県・道に関しては、天鳳元年に県・道の境界を再区画して二二〇三県にし、三六〇の郡・県に「〇〇亭」と名づけ、また名称を頻繁に変更したというから、県・道の現場はかなり混乱したと推測される。しかし県・道の官制にかぎっていえば、始建国元年に県の令・長を宰にあらためたことがみえるだけである。以上の改革のうち、県・道の数については検討すべきことがある。それは封爵の政策に関連することである。すでにみたように、王莽は始建国元年に劉氏の諸侯王を廃しているが、前漢の列侯などに相当する諸侯は数多く封じている。すなわち、『漢書』王莽伝上によると、まず居摂三年（八）に、殷・周の爵制を参考にして、将帥たちに爵邑を賜うことを請うて、侯・伯・子・男の諸侯と、漢の関内侯に相当する附城、あわせて数百人を封じた。また『漢書』王莽伝中によれば、始建国四年には公・侯・伯・子・男の諸侯は合計一八〇〇人、附城も一八〇〇人という定員をさだめ、公爵には一万戸・方一〇〇里、侯・伯爵に五〇〇〇戸・方七〇里、子・男爵に二五〇〇戸・方五〇里、そして附城には九〇〇戸・方三〇里というように、それぞれの爵位に応じた封邑の規模をきめ、これらの爵にふさわしい功績をもつ人物の出現をまつことにした。そしてこの年までに封ぜられた公・侯・伯・子・男が合計して七九六人、附城が一五一一人であり、王氏の九族の女子八

三人、漢室の女孫三人が任に封ぜられている。ただし、これらの封君の多くは封邑を賜与されないまま放置されていたという。⁽¹⁷⁾問題は、前漢末の一五七七県の一・四倍弱にふくれあがった天鳳元年の二二〇三県と、諸侯や附城の封邑との関係である。⁽¹⁸⁾すなわち二二〇三県の中に諸侯や附城の封邑はふくまれるのか、それとも封邑は県・道とは別に設定されるべきものであったのかということである。この点について林劍鳴氏は、二二〇三県のほかに二三〇七の封地（始建國四年の諸侯七九六と附城一五一一の合計）があつたとみているようである。⁽¹⁹⁾もちろん、王莽は封地をまるまる賜与したわけではないし、賜与する気がどこまであったのかも疑問がこのころのであるが、かりに林劍鳴氏のように理解すると、県・道と封邑は合計して四五一〇（諸侯・附城が定員に達したら五八〇三）の多きにのぼることになり、現実的ではないように思える。封邑を実際に賜与する意志が王莽にあったとすれば、たとえば一万戸や五〇〇〇戸にのぼる公爵・侯爵・伯爵の封邑には一県をあて、二五〇〇戸以下の子爵・男爵・附城の封邑には、その規模に応じて県の中の郷か亭（のいくつか）をあてることを予定し、それらをふくめて二二〇三県にすることにしていたと考えるのが妥当であろう。別稿でのべたように、前漢時代の列侯はすべて県侯であり、列侯が封ぜられれば列侯国（県）の数がふえたが、後漢時代には県侯のほかに郷侯・亭侯があり、郷侯・亭侯がおかれても列侯国（県）の数はふえなかった。⁽²⁰⁾こうした列侯制度の改革は、王莽期の制度をひきついだものである可能性を指摘しておきたい。

二 王莽の地方行政改革の限界

前節にまとめた王莽の地方行政制度の改革は、州・郡・県の区画とそれぞれの長官クラスに関する改革が中心であった。これらを見るかぎり、王莽期の地方行政は大幅にかわったように思われるが、具体的にみると、長官クラスの改革というのは官名の改変が中心であり、管掌事項・権限に大きな変化があった形跡はみあたらない。王莽期の地方行政を理解するためには、以上の改革とは別に、現実に地方行政の実務処理を担当する属吏をふくむ吏員組織はどのようになっているのか、また郡・県はそれぞれ他の官府とどのような関係をもっていたのかという点に関しても検討する必要がある。王莽が州・郡・県の吏員組織全体をどのような構成にしたのか、『漢書』・『後漢書』には詳細な記述はあまりないのであるが、その中において、出土資料・伝世資料をふくめるとある程度の史料がそろう郡・県の吏員組織について検討していこう。

王莽によって官名を改変された郡の長官クラスは、その新しい官職名が実際に存在したことが『漢書』・『後漢書』で確認されるほかに、出土資料でも、簡牘類には敦煌漢簡に「文德（＝敦煌）大尹」（疏三五七）⁽²¹⁾、居延旧簡に「設屏（＝張掖）右大尉」（二八八・三〇）⁽²²⁾などがみえ、封泥では「予章南昌連率」・「鉅鹿大尹章」・「雁郡大尉章」などを確認できる。前漢の辺郡には太守のもとに次官として、民政を担当する丞と、兵馬をつかさどる長史とがあったが、王莽期にも、たとえば敦煌漢簡に「文德長史」（疏三五七）⁽²³⁾がみえるから、王莽期にも前漢同様に長史が存在し

ていたことは確実である。属吏クラスでは、居延旧簡に「酒泉大尹史」(四〇七・一九)、敦煌馬圈湾烽燧遺址出土の簡牘に「尹史」(七九・D・M・T五・一三八)⁽²⁵⁾がみえているが、これらは前漢の卒史に相当する属吏と推測される。また『漢書』王莽伝下の地皇四年(＝更始元年、二三)の条に、挙兵して輔漢左將軍と自称する鄧曄が武関をひらい、漢軍をむかえ、ともに京師倉を攻めたときに弘農掾王憲を校尉に任じたところがあるが、これは王莽支配下の弘農郡の掾を任用したのであらう。『後漢書』伝一四馬援列伝には、馬援が扶風郡の督郵となって囚人を司命府(王莽がおいた非違を糾察する中央官)に送致したとある。『後漢書』伝四二崔駰列伝をみると、崔駰の祖父の崔篆は王莽期に、郡文学から明経にあげられて歩兵校尉に登用されたものの、すぐに辞任したが、崔篆はのちに建新(千乘)大尹に任ぜられてしぶしぶ赴任することにし、

乃ち遂に單車(＝供の車がない、一台だけの車)にて官に到るも、疾と称して事を視ず、三年行県せず。門下掾の倪敞諫むるや、篆乃ち強ひて起ちて春(＝春令)を班つ。至る所の県は獄犴(＝県の牢獄と郷・亭の牢獄)填ち満てり。篆涕を垂れて曰く、「嗟呼、刑罰中らずして、乃ち人を奔に陥す。此れ皆な何の罪ありて是に至るや」と。遂に平理(＝公平に審理する)して、出す所二千余人なり。掾史叩頭して諫めて曰く、「朝廷(＝王莽)は初政(＝即位したばかり)、州牧は峻刻なり。過ちを宥し枉るを申すは、誠に仁者の心なり。然れども独り君子と為るは、將に悔い有らんとするか」と。篆曰く「……」と。

とある。ここにみえる郡文学・門下掾・掾史はいずれも王莽期の郡の属吏とみてよい。すなわち王莽期の郡では、太

守・都尉クラスこそ官名が大きくわり、太守クラスの官名改変の結果として属吏層にも大尹史・尹史という呼称が出現したが、掾・督郵・門下掾・郡文学あるいは掾史のように、多くの属吏が前漢とかわらない職名をもっている。王莽期の郡府の属吏をふくむ吏員組織も前漢時代と基本的にかわっていなかったと考えてよからう。

さきに紹介したように、県・道の官制改革といえ、始建国元年（九）に県・道の令・長を宰に変更しただけであった。県宰・道宰の事例は、文献史料にみえるほかに、官印に「棘陽県宰印」・「建伶道宰印」など（羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』巻四）を、封泥に「富成宰之印」（呉式芬『封泥攷略』巻八）を確認することができる。そのほか、『後漢書』伝二景丹列伝に、王莽期に景丹は固徳侯相から朔調（上谷）連率副貳（朔調属令、前漢の上谷都尉）にうつったとあり、侯相も存在したことがわかる。県・道の丞・尉クラスについては、居延旧簡に「居延丞」（二八八・三〇）、居延新簡に「居成尉」（EPT六五・二三A）があるが、いずれも明らかに王莽期のものとわかる木簡に記載されている。『漢書』王莽伝下の天鳳六年の条には「郡・県の黄綬」がみえるから、前漢と同様にこの時期の県・道の「丞・尉」なども、銅印黄綬をおびていたであろう。また『後漢書』伝一劉盆子列伝に、琅邪郡海曲県で呂母の息子が「県吏」となって県宰に殺され、反乱をおこした呂母が県宰をとらえると、「諸吏」は叩頭して許しを請うたとあるが、この県吏・諸吏は海曲県の属吏をさすのであろう。²⁸⁾ 関係史料が少ないため、具体的に属吏組織を復原することはできないが、郡の場合を参考にして、県・道は前漢同様の組織をもっていたとみてよからう。

それでは王莽期の郡・県はそれぞれ他の官府とどのような関係をもっていたのであろうか。『漢書』王莽伝下の地

皇二年（二一）の条をみると、赤眉の賊などが各地におこっている状況をふまえて王莽は書を下し、七公（太師・太傅・国師・国将の四輔と大司馬・大司徒・大司空の三公）を責めた中に

……七公は其れ厳に卿大夫・卒正・連率・庶尹を勅め、謹んで善民を牧養し、急いで盜賊を捕へ殄せ。……

とある。この前後の記事は、王莽の認識が現実から大きくかけ離れていることをのべているのであるが、この引用部分から七公の制度上の職務をよみとることは可能であろう。ただし、『漢書』王莽伝中の始建国元年の条によれば、四輔は時節の陰陽をつかさどることが主たる任務であり、現実の行政は三公、すなわち武事をつかさどる大司馬、民事を主司する大司徒、水土の事をおさめる大司空の職務ということになる。このことをふまえて王莽の書を見ると、三公は卿大夫や郡の卒正・連率、あるいはその他の長官に命令して民政につとめ、治安を回復させることになっていた。また『漢書』王莽伝中の天鳳三年（一六）五月の条に引く王莽の言に

其れ上計の時の通計を用て、天下幸ひに災害無からば、太官の膳羞（＝料理）は其の品を備へ、即し災害有らば、什率の多少（＝一〇分の一、一〇分之二などという不作の度合い）を以て膳を損ぜよ。

とあるが、ここでは上計の結果によって共工（少府）の太官が用意する料理が加減されるのであるから、この上計は郡から三公に提出されたものということになろう。すなわち、王莽期に中央において郡による行政を統轄し、上計をうけていたのは三公であったことになる。別稿でのべたように、前漢において郡・国は外朝、とくに丞相との間に上計・考課の関係をもっており、始建国元年の三公の任務分担の体制を継承した後漢では、地方行政を実務面で指導・

統轄するのはもっぱら三公の任務であり、郡・国からの上計簿を受理し、審査して守・相の殿最を上奏するのも三公の任務であった。³⁰前漢と後漢における中央と郡・国とのこうした関係は、王莽期においても基本的に変わらなかったといえよう。

『漢書』王莽伝下の地皇二年の条に引用する翼平連率³¹田況の上書には、当初、弱体であった赤眉の賊が強大になった事情について、

咎は長吏の意と為さざるに在り。県は其の郡を欺き、郡は朝廷を欺き、実は百なるも十と言ひ、実は千なるも百と言ふ。朝廷は忽略^{こつりやく}（＝ゆるがせ）にして、輒ち督責せず、遂に延曼（＝蔓延する）して州を連ぬるに至る。

とある。田況は制度の通りに行なわれていないことを批判しているのであるが、この記事から、本来、県は盜賊の発生とその勢力の規模を郡へ、郡は朝廷に報告するようになっていたことがわかる。そしてこうした報告は行政全般についても同様になされていたと考えるべきであろう。また、さきに引用した『後漢書』伝四二崔駰列伝によると、崔篆は建新（千乘）大尹に着任後の三年間、郡内を行県しなかったが、門下掾に諫言されて諸県をまわると、公正でない裁判によって各県内の牢獄は囚人で一杯になっていたために、崔篆は公平な審理を行なって二千余人を釈放したという。以上の事実から、郡の大尹などは毎年行県することになっていたこと、裁判はまず県・道で行ない、囚人は県・道内の牢獄に収監されており、県・道による裁判に何かの問題があれば郡が関与するようになっていたことをよみとることができる。また、さきにみたように、『後漢書』馬援列伝に扶風郡の督郵がみえた。ここの督郵は囚人を司命

府に送致していたが、本来の任務としては所属県・道の吏員の監察にあたっていたはずである。軍事に関連して、『漢書』王莽伝下の地皇二年の条には、翼平連率田況が赤眉の賊に対して郡民四万余人を発したために、王莽は田況を「未だ虎符を賜はらずして擅に兵を発す。此れ兵を弄ぶなり。……」と責めている。王国維『觀堂集林』卷一八史林一〇の「記新莽四虎符」は、伝世品であるが王莽期の虎符四点を紹介している。⁽³²⁾ つぎに王国維の釈読・推測にもとづいて、それぞれの銘文を列記する（／符号の上は虎符の背文、下は脇文である）。

新与河平（＝平原）羽眞（＝羽侯国）連率為虎符／河平郡左二一

〔新 河平羽貞連率と虎符を為す／河平郡左二二〕

新与庄戎（＝隴西）西道（＝西県）連率為虎符／庄戎郡右二一

新与敦德（＝敦煌）広桓（＝広至）連率為虎符／敦德郡左二一

新与武亭（＝東郡？）渭治（＝清県）連率為虎符／武亭

これらの銘文の意味を第一の虎符を例にとって説明すれば、「新の朝廷は、羽貞県（前漢の羽侯国）に治所をおく河平郡（前漢の平原郡）の連率と虎符を割ちあつたが、これはそのうち河平郡が保有する左二番目の虎符である」という意味である。これらの史・資料によれば、王莽期にも前漢と同様に、朝廷から出兵命令を伝達する使者の真实性を証明する虎符を携帯する使者をまっけて、郡の卒正・連率・大尹が発兵するように定められていたことがわかる。徴税に関連して、『漢書』王莽伝中の天鳳三年一〇月の条に、平蛮將軍馮茂にかわつて西南夷の句町をうつことになった

廉丹・史熊について

更めて寧始將軍廉丹と庸部（＝益州）牧史熊を遣はして句町を撃ち、頗る首を斬り、勝つこと有らしめんとす。

莽 丹・熊を徴す。丹・熊 調度（＝租税の徴収）を益し、必ず克ちて乃ち還らんと願ふ。復た大いに賦斂せんとするも、就都（＝蜀郡の一部）大尹馮英 給するを肯んぜず、上言すらく、「……今、丹・熊 自ら期会に詭めらるるを懼れ、諸郡の兵・穀を調発し、復た民を訾（＝民の財産を調査する）りて其の十の四を取らんとす。

空しく梁州（＝益州の旧名）を破（＝破産させる）りて、功は終に遂げざらん。……」と。

とあり、寧始將軍廉丹と庸部牧史熊は句町攻撃のための特別税として、庸部の民衆の財産の四割を税として徴収しようとしている。戦争のために派遣された將軍や州牧が一つの州全体の民衆の財産を調査し、課税することは、現実には到底不可能であろう。はたして、右の記事では、軍費調達のための賦斂について、就都大尹が「給する」ことを拒否する姿勢をしめしている。これは、將軍や州牧の要請によって、郡が徴税を担当することになっていたことを前提としているといえよう。ただし、別稿で検討したように、前漢後半期と後漢時代の郡・国は徴税の方針をしめすことはあっても、徴税の実務にかかわることはなく、それは県・道が担当していた⁽³⁸⁾。このことを参考にするとき、王莽期においても前漢同様に、通常の賦税はもちろん、軍費調達のための特別税も、県・道が徴収し、郡はその監督にあたったのであろう。

新（千乗）大尹崔篆が郡内で審理をやりなしておして二千余人を釈放したとき、建新郡の掾史は「州牧は峻刻なり」と諫言している。これは、当時の州牧が監察官として厳しかったことをいうのであろう。次節で紹介するように、『後漢書』伝七岑彭列伝によると、建武五年（二九）一二月に交趾牧鄧讓は江夏太守侯登ら七人の郡・国の守・相をひきいて光武帝に貢献・帰属している。王莽期に州牧が郡を監督する一段高い立場にあったために、交趾牧がひきいることになったのであろう。また右にみたように、天鳳三年一〇月に句町を討つことになった寧始將軍廉丹と庸部（益州）牧史熊は、庸部の民衆から特別税を徴収しようとしたが、これは郡・県が徴収することを前提としていた。州は徴税の実務を担当できるほどの体制をもたなかったのである。王莽期の州牧が軍事出動したことは『漢書』王莽伝でしばしば確認できるが、行政面では、一応は郡を監督する位置にあったものの、地方行政を完全に掌握するにはほど遠かったというべきであらう。

王莽の改革は地方行政よりも、「はしがき」で簡単に紹介したように中央官制や礼制、経済・財政政策、対外政策などに重点がおかれており、地方行政においては目立ちやすい州ないしは監察機関や郡に改革の中心があって、県・道に関する改革は少なかった。官制の面からみれば、監察機関の新設や、郡の太守・都尉、県・道の令・長などの官名の改変という改革は一応行なわれているが、地方行政の実務処理を担当する郡・県の属吏をふくむ吏員組織にはほとんど手をつけていなかった模様である。郡・県それぞれと他の官府との関係を見ると、中央と郡との間では、三公が郡を指導し、郡は三公に必要な事項を報告し、上計簿を上呈しており、軍事に関しては朝廷と郡の卒正・連率・大尹

との間で虎符を割ちあっていた。郡と県・道との間では、郡の長官が行県を行ない、各種の指導にもあたっており、県・道は郡に必要事項を報告し、上計簿も提出していたと推測される。裁判はまず県・道で行ない、そこに何かの問題があれば、郡が関与することになっており、徴税については、郡はその方針の提示と監督にあたり、徴収の実務は県・道が担当していた。州牧は監察官として厳しく、また行政面で郡・県を監督する立場にあったが、地方行政を完全に掌握するほどではなかった。史料が乏しいために確認しえた事項は少ないのであるが、みたかぎり、王莽期の地方行政のあり方は前漢後半期のそれと実質的に変わりなかったと理解してよさそうである。

このことは、前漢末に任用された地方長官の多くが王莽の篡奪後もその地位をたもっていたという事実と関係するところも大きいであろう。たしかに、平帝期に美陽令であった蜀郡の王皓は、王莽が篡奪すると官をすてて故郷にかえり（『後漢書』伝七一独行・李業列伝）、酒泉都尉の許楊は王莽の篡奪後に姓名をかえ、巫医となって他郡へ逃げかくれた（『後漢書』伝七二上方術・許楊列伝）というように、官を去った事例もみられる。しかし、前漢末期に清水長となり、五県の令・長を兼摂していた公孫述は王莽の天鳳年間に導江（蜀郡）卒正になり（『後漢書』伝三公孫述列伝）、平帝期に漁陽都尉になった郭伋は王莽期にはいっても上谷大尹・并州牧を歴任し、さらに更始帝期に左馮翊、光武帝期に雍州牧を連続してつとめ（『後漢書』伝二二郭伋列伝）、錫光は平帝期から王莽期、そして建武（二五～五五）初年まで交趾太守として善政につとめていた（『後漢書』伝六六循吏・任延列伝）というように、前漢末から王莽篡奪後まで継続して地方行政にたずさわった人物が多い。『漢書』王莽伝中の始建国元年秋の条に

五威將 符命を奉じ、印綬を齎^{もたら}し、王侯以下、及び吏の官名更まる者、外は匈奴・西域、徼外の蛮夷に及ぶまで、皆な即ち新室の印綬を授け、因りて故の漢の印綬を收む。

とあるように、官吏は、諸侯や国外の蛮夷の首長などと同様に新の印綬を授与され、漢の印綬を回収されている。もちろん、この官吏の中には郡の太守・都尉や県の令・長から改変されたばかりの大尹・太尉や宰などもふくまれるのであり、この記事によるかぎり、前漢末の地方長官の多くは、印綬をとりかえられながら王莽の即位後も継続して任用されていたことがうかがえる。その間、郡・県の長官のもとで実務を処理していた属吏層は、王莽が郡・県の属吏組織にほとんど目をむけていない事実を考えると、多くの場合、前漢末の属吏層がそのまま任用されつづけたと理解すべきであろう。王莽は地方長官クラスの官名を改変して目先をかえただけで、基本的には郡・県の組織も、他官府との関係も人材も、前漢末のものとはほとんどかわらなかったことをしめすといえよう。

王莽が属吏組織よりも太守や令・長に、県・道よりも州・郡に、地方よりも中央に改革の重点をむけたのには、いくつかの背景を考慮することができる。その第一は王莽の経歴に関することである。王莽は父王曼の早死によって、若いころ苦労したのであるが、それでも外戚王氏の一人として京師で成長しており、哀帝期に封地である南陽郡新都侯国に就国していた時期以外は地方を知らない。またその官歴をみても、成帝期に黄門郎、射声校尉、骑都尉光禄大夫侍中、大司馬をつとめ、哀帝期に野にくだったが、平帝期に大司馬にかえりさいてからは、「はしがき」で紹介した通りの官を歴任したあとで即位しており、行政の実務を処理する官についた経験がなかった。この経歴が王莽の目を

中央にむけさせたのであろう。第二は王莽政権の統一政権としての成熟度に関することである。前漢も後漢も、建国した当初は基盤とする地域の支配の確立と各地にのこる群雄の平定につとめ、十数年をへて一応の天下統一を達成している^⑤。その点、それなりに「完成」された前漢王朝を篡奪した王莽政権は群雄を平定する必要はなかった。しかし王莽政権もまず政権の基礎をかためる必要はあった。前漢の朝廷内部で政権をうばった王莽にとっては、中央において諸改革を推進することが基礎固めにあたったといえよう。そのころ地方では、居摂元年^⑥（六）四月、安衆侯劉崇が侯相の張紹とはかって百余人で南陽郡宛県を攻撃した。翌居摂二年九月、東郡太守翟義は衆十余万人で挙兵し、右扶風槐里県では男子趙明・霍鴻らが、翟義に共鳴して十万人近くの兵を以て長安を攻撃しようとしている（以上、『漢書』王莽伝上）。また第一節で紹介したように、居摂三年（八）以降、公・侯・伯・子・男の諸侯と附城を数多く封じたが、これらの封君の多くは封邑を賜与されないうまま放置されていた。こうした事實は、王莽が地方を確実に掌握していたわけではないことをしめしている。すなわち、王莽が膝元の基礎固めをはかっている段階で諸改革が失敗して政治が混乱し、地方や実務の改革に目をむける余裕のないまま一五年で滅亡してしまい、その結果として、中央官制や郡の太守など目立った部分の改革でおわってしまったといえよう。

以上、地方行政を中心に王莽の政治をみてきたが、王莽の政治は有効に機能していたのであろうか。『漢書』王莽伝中の天鳳二年（一五）の条には、地方行政をふくむ政治全体に対する王莽の姿勢をうかがわせる記事がある。

莽 意に以為へらく、「制定まらば則ち天下自ずから平らかならん」と。故に地里を鋭思（「こまかく考える」）

し、礼を制し楽を作り、六經の説を講合（＝議論しあう）せしむ。公卿旦^{あした}に入り暮れて出づるも、議論は連年決せず、獄訟の冤結（＝無実の罪による不満）、民の急務を省みるに暇あらず。県宰欠くるも、数年、守兼（＝兼任する）せしむ。……莽前に権を顚^{もつぱら}にして以て漢政を得しことを自ら見^{おも}ひ、故に努めて自ら衆事を慥^すぶ。有司成る（＝できあがった政策）を受けて苟免（＝責任逃れの態度をとる）す。諸の宝物名・帑藏・錢穀の官は、皆な宦者之を領し、吏民の上す封事の書は、宦官・左右開き発し、尚書は知るを得ず。其の臣下を畏備（＝畏れ警戒する）すること此くの如し。又た制度を更改するを好み、政令煩多なり。奉行（＝政務の執行）に当る者は、輒ち質問して乃ち以て事に従ひ、前後相ひ乗^{つも}り（＝前の仕事と後の仕事が重なり）、憤^{かいほう}眊（＝混乱して見通しがたない状態）渫^ちらず。莽常に燈火を御して明（＝夜明け）に至るも、猶^しは勝^しぐ能はず。尚書は是に因り姦を為して事を寢^やめ、上書して報^{こた}へを待つ者は年を連ぬるも去るを得ず、郡県に拘繫さるる者は赦に逢ひて後に出で、衛卒は交代されざること三歳なり。

これによると、王莽は制度さえ制定すればすべてがうまくいくと考えて煩雑な改革を行ない、自分自身が漢の政権をうばった経緯を考慮して、すべてのことを自分で決済しなければ気がすまず、そのため、有司は受動的になって責任逃れの態度をとっていた。王莽以下の政務のとり方をみると、王莽自身は夜を徹して朝まで執務しても政務を処理できず、公卿は朝早くから夜遅くまで議論をつづけても結論をえられず、尚書は宦官・側近に職務をうばわれて悪事にはしり、実務にあたる吏員は政策の意図・経緯を質問しなければ執行できないありさまであった。その結果、裁判の

冤罪、民間の急務は放置され、上書した者は何年も回答をもらえず、郡・県に拘繋された者は裁判をうけられないうちに恩赦にあって釈放され、衛卒に徴發された者は交代できないまま三年もすぎ、県宰が欠員になっても数年にわたって後任はきまらず、兼任のままで放置されているという状態であった。この記事によるかぎり、王莽自身から公卿・尚書、さらに郡・県にいたるまで、政治全般がほぼ機能麻痺におちいついていたといわざるをえない。

地方行政自体の機能の有効性に目をむけると、個人レベルでは『後漢書』任延列伝に、建武年間の九真太守任延の治績を列記したあとで、辺郡太守として異民族をふくむ郡民の教化で同様な成績をおさめた事例として、さきに簡単に紹介した前漢末から王莽期をへて建武初年まで交趾太守をつとめた錫光について

初め平帝の時、漢中の錫光 交趾太守と為る。民夷を教導し、漸（＝感化する）するに礼義を以てし、化声（＝教化の評価）は【任】延に侔^{ひと}し。王莽末、……

とあり、『後漢書』伝一六侯霸列伝によれば、王莽期の随県宰の侯霸は県内の盜賊を平定して治安を安定させ、のちに淮平（臨淮）大尹として政治を安定させて有能との評判をえていたというように、善政で名をあげた地方長官もみられる。その一方で『漢書』王莽伝下の地皇二年の条に引用する翼平連率田況の上書に、当初、弱体であった赤眉の賊が郡・県の対応の悪さの故に強勢になったことを指摘しており、『後漢書』崔駰列伝には、建新（千乘）郡で、県の不公平な裁判によって二千余人の民が不当に投獄されていたとある。また、財政状態が極端に悪化していた王莽期には、『漢書』王莽伝中の天鳳三年（一六）の条によると、五月に王莽が吏禄制度を発令したあとに

吏 終に禄を得ず、各々官職に因りて姦を為し、賂賂を受取し以て自ら共（供）給す。

とあり、より具体的には、『漢書』王莽伝下の天鳳五年（一八）の条に

天下の吏 奉禄を得ざるを以て、並びに姦利を為し、郡尹・県宰は家に千金を累ぬ。

とあるように、俸禄をえられなかった郡大尹や県宰などが、収賄その他で千金にのぼる私財をたくわえたことをつたえている。さらに『漢書』王莽伝下の地皇二年の条に引く翼平連率田況の上書は、さきにみたように、県は郡をあざむき、郡は朝廷をあざむいていたことを紹介していたが、それにつづけて

乃ち【朝廷は】将率（しょうすい＝將軍）を遣し、多く使者を發し、伝しく相ひ監趣（あわた＝取り締り促す）せしむ。郡・県力めて上官に事へ、詰対（おつたい＝取り調べ）に応塞（おうそく＝応答する）し、酒食を共（供）し、資用を具へ、以て【身を】断斬より救はんとす。復た盜賊を憂へ、官事を治むるに給あらず。

とあるように、郡・県の官府・吏員は、監察のために朝廷から派遣されてくる将帥や使者を接待して自分自身をまもることにいそがしく、盜賊対策や公務に取りくむ余裕はなかったと指摘している。

「はじめに」で一瞥した王莽の改革のうち、南北郊祀制や天子七廟制などの礼制に関する改革は後漢以降の制度に影響をあたえており、それなりに成功したといえよう。その一方で、民政に関係してくる土地制度、経済・財政政策などや対外政策の諸改革はほとんど失敗におわっているが、以上、紹介した事例からわかるように、地方行政もほとんど機能しなくなっていたといわざるをえない。

ここで王莽の地方行政に関する改革をふりかえると、煩雑なまでに重複した監察体制を設置したことで、諸侯王の制度と郡国制を基本的に廃止し、郡・県の境界を再区画して一二五郡、二二〇三県にしたり、郡・県の名称を頻繁に変更したこと以外は、郡の太守と県・道の令・長の官名をあらためた程度におわっており、前漢末の制度と基本的にはかわっていない。そうであるにもかかわらず、このように機能していないとすると、地方行政制度として郡県制はもはや有効でなくなっていたのであろうか。もう一度、王莽の政治のやり方をみなおすと、王莽は、制度は制定しさえすればうまくいくという考えのもとに、地方よりは中央、県・道よりは州・郡、属吏組織よりは太守や令・長といった目立つところに重点をおいて煩雑な改革を行ない、監察体制は強化したが、行政の実務の効率化にはほとんど目をむけていなかった。また財政状態が極端に悪化していて俸禄をえられなかったために、郡・県の長官などが収賄その他で私財をたくわえていたという事情もあった。このように王莽政治の中で郡・県が有効に機能していなかったのは事実であるが、それは当時の郡・県をとりまく環境に問題があったのであって、郡県制そのものに欠陥があったとは簡単にいえない。江幡真一郎氏は、後漢では皇帝の夭折があいつぎ、中央政府は外戚と宦官のためにしばしば混乱したのに、帝国がともかく二〇〇年近く存続したのは、帝国をささえる基盤である地方農村が一応は健全であり、地方政治が案外うまくいっていたからであろうと推測している。^⑧後漢時代の農村が健全であったのか、地方行政が後漢一代を通してうまくいっていたのかいささか問題がのこる。しかし少なくとも後漢時代の地方行政は、次節でのべるように前漢後半期の地方行政制度をうけついで出発し、別稿で検討したように、吏員組織の充実などの施策を実施した

り、^③地方行政刷新策をうちだしたりして、^④それなりに機能していた時期があるのは事実である。

三 後漢の郡県制復活

『漢書』王莽伝下には、地皇四年（二三）「三月辛巳朔」に劉玄（更始帝）がたち、改元して更始元年としたとあるが、『後漢書』紀一光武帝紀の更始元年の条では「二月辛巳」に更始帝がたったことになっている。暦法の殷正にもとづく王莽の地皇四年は、少なくとも王莽が死ぬ一〇月までつづくが、更始帝の側は地皇四年二月がおわった翌日を夏正にもとづく更始元年の二月一日（朔日）にしたのである。すなわち、更始帝の勢力にとって、更始元年にあたる年には地皇四年二月と更始元年二月と、二月が二回あり、一年間は一三ヵ月あったことになる。^⑤更始帝は即位と同時に王莽の殷正を否定して夏正を復活し、自らの政権が前漢をひきつぐ政権であることを表明したことになる。

更始元年と平行していた地皇四年の一〇月（更始元年九月）に王莽は殺されるが、その前後の状況について、『漢書』王莽伝下の地皇四年の条に

及び曹部監杜普、陳定（＝梁郡）大尹沈意、九江連率賈萌 皆な郡を守りて降らず、漢兵の誅する所と為る。賞都（＝汝南郡の一部）大尹王欽及び【九虎將軍の一人】郭欽 京師倉を守り、莽の死するを聞きて、乃ち降る。

更始 之を義とし、皆な封じて侯と為す。

とあるように、王莽に臣節をつくして漢兵に殺される地方長官や、更始帝に投降する大尹があった。またこの当時、各地で勢力を確立しはじめていた群雄は、『後漢書』光武帝紀上の更始元年の条に

【故の趙繆王の子の劉】林、是に於て乃ち詐りて卜者の王郎を以て成帝の子の子興と為す。十二月、郎を立てて天子と為し、邯鄲に都す。遂に使者を遣はして郡国を降下せしむ。

とあるように、周辺の郡に投降を呼びかけたり、『後漢書』伝九耿弇列伝に

王莽敗れ、更始立つに及び、諸將の地を略する者（諸將略地者）、前後、多く威權を擅にし、輒ち守・令を改易す。

とあるように、現職の郡・県の長官を罷免して他の人物にさしかえることもあった。世の帰趨がさだまらない中、地方長官は帰属すべき群雄をさがし、更始帝をはじめとする群雄はできるだけ多くの郡を獲得しようとしていたようである。そして少なくとも更始帝は、『後漢書』伝五鄧晨列伝に

更始 北のかた洛陽に都し、晨を以て常山太守と為す。

とあり、『後漢書』伝七岑彭列伝には

更始 乃ち彭を封じて帰徳侯となし、……。彭 復た大司馬朱鮪しゅいの校尉と為り、鮪に従ひて王莽の楊（揚）州牧李聖を撃ちて之を殺し、淮陽城を定む。鮪 彭を薦めて淮陽都尉と為す。……。彭 兵を引きて【將軍徭】偉を攻め、之を破る。潁川太守に遷る。

とあるように、郡の長官クラスの官名を前漢時代の官名、すなわち太守・都尉にもどしている。また第一節でみたように、王莽は天鳳元年（一四）に三輔をわけて六尉郡とし、太守の代わりに大夫をおいたが、そのことをつたえる『漢書』王莽伝中の記事の顔師古注には、六尉郡の名称と大まかな区画が記されている。それによれば左馮翊の東部は師尉郡、西部は列尉郡であったという。ところが、『後漢書』伝二郭伋列伝に

【郭伋】王莽の時に上谷大尹と為り、并州牧に遷る。更始新たに立ち……。更始素より伋の名を聞き、徴して左馮翊に拜し、百姓を鎮撫せしむ。

とあるように、郡名も長官の官名も左馮翊にもどされている。更始帝は地名も官名も前漢の旧にもどす方針をとっていたと考えてよからう。

他方、『後漢書』光武帝紀上には、更始元年のこととして

十月、節を持して北のかた【黄】河を度り、州・郡を鎮慰す。到る所の部県にて、輒ち二千石・長吏・三老・官属より、下は佐史に至るまでを見て、考察・黜陟すること、州牧の行部の事の如くす。輒ち囚徒を平遣（＝公平な審理を行ない、釈放する）し、王莽の苛政を除き、漢の官名を復す。吏人（民）は喜悅し、争って牛・酒を持ちて迎へ勞ふ。

とある。これは劉秀が更始帝の命で河北平定にむかうときの記事であるが、「節を持して北のかた河を度り」以下、すべて劉秀が主語の記事である。この記事から、劉秀もこの時に王莽の官名をやめて漢の官名を復活する方針を明確

にしたことがわかる。もちろん、この方針の中には郡の卒正・連率・大尹を太守に、県・道の宰を令・長にもどすと、地方行政の諸制度を前漢の制度にもどすことをふくんでいたといえよう。この当時の劉秀はまだ勢力を確立していたわけではないが、この方針は、劉秀が勢力を確立し、帝位についたのちまで堅持されていく。

『後漢書』光武帝紀上の更始二年（二四）正月の条をみると、河北において劉秀は薊を平定したものの、邯鄲に拠点をおく王郎の勢力が薊にまでおよんでくると、二千石以下がこぞって王郎にしたがったため、劉秀は難をさけるために南下をつづけ、やっと信都太守任光の協力をえて、滂県（兵四〇〇〇人）を獲得し、王莽が任命した和成（鉅鹿郡の一部）卒正祁彤の投降をえたのであった。その後、劉秀は勢力を強化し、建武元年（二五）六月に皇帝位についた（光武帝）。このときに元号をたてて建武としたのであるが、曆法は更始帝同様に前漢の夏正をひきついである。光武帝はさらに他の群雄の鎮圧をすすめ、ついに建武一〇年（三四）一〇月に隴西の隗囂政権をたおし、建武一二年（三六）一月には蜀の公孫述政権をくだして統一を達成した。この間のこととして『後漢書』伝七岑彭列伝に

是に於て【交趾牧鄧】讓 江夏太守侯登・武陵太守王堂・長沙相韓福・桂陽太守張隆・零陵太守田翕・蒼梧太守杜穆・交趾太守錫光等とともに、相ひ率ゐて使を遣はし貢獻し、悉く封ぜられて列侯と為る。

とある。『後漢書』光武帝紀上によれば、建武五年（二九）二月のことであるが、交趾牧鄧讓にひきいられた七郡・国の守・相が光武帝に貢獻・帰属している。この場合、各郡・国の長官の官名は漢の守・相にかわっているが、彼らの配下の郡・国および県・道の吏員組織は、基本的にそのまま後漢にひきつがれていたのであろう。

州や監察の制度について、王莽期に設置された部監・執法左右刺姦・三公士・牧監副・秩元士・冠法冠といった官名は後漢時代では確認できない。後漢ではこれらはすべて廃止し、州や監察の制度は前漢後半期の状態にもどしていたのであろう。

王莽の地方行政制度から後漢の制度への変遷において、いま一つ問題になるのは郡国制の問題である。王莽は始建国元年（九）に諸侯王を公に降格させ、翌年には公の璽綬を返還させて、基本的に郡国制を廃止していた。しかし後漢の地方行政制度は郡国制である。郡国制は、いつ、どのようにして復活したのであろうか。『後漢書』伝一劉玄列伝をみると、更始二年に洛陽から長安にうつった更始帝は

更始、乃ち先ず宗室の太常將軍劉祉を封じて定陶王と為し、劉賜を宛王と為し、劉慶を燕王と為し、劉歆を元氏王と為し、大將軍劉嘉を漢中王と為し、劉信を汝陰王と為す。後ち遂に王匡を立てて比陽王と為し、王鳳を宜城王と為し、朱鮪を膠東王と為し、衛尉大將軍張卬を淮陽王と為し、廷尉大將軍王常を鄧王と為し、執金吾大將軍廖湛を穰王と為し、申屠建を平氏王と為し、尚書胡殷を隨王と為し、柱天大將軍李通を西平王と為し、五威中郎將李軼を舞陰王と為し、水衡大將軍成丹を襄邑王と為し、大司空陳牧を陰平王と為し、驃騎大將軍宋佻を潁陰王と為し、尹尊を郾王と為さんとす。

とあるように、定陶王劉祉以下二〇人の諸侯王を封じようとしたが、朱鮪は辞退した。のこる一九人のうち比陽王王匡以下の一三人は異姓の諸侯王である。異姓の諸侯王が存在するという点で、更始帝の諸侯王制・郡国制は前漢後半

期のものとは性格を異にしているというべきであろう。更始帝が封建を行なったのち、赤眉軍は更始三年（建武元年、二五）九月に更始帝の都である長安に入城し、一二月には更始帝を殺している。その間、更始帝の諸侯王たちは、一部は更始帝に殺され、一部は更始帝に反し、一部は光武帝に帰属していった。

他方、光武帝にとっては、「厭新將軍」と自ら号していた宗室の劉茂が、建武元年七月に衆をひきいて投降してきたときに中山王に封じた（『後漢書』光武帝紀上）のが最初の諸侯王であろう。その後、建武二年（二六）四月には、叔父劉良を広陽王に（のちに趙王にうつす）、兄劉續の長子劉章を太原王に、劉續の子の劉興を魯王に、族兄の子で更始帝のときに定陶王であった劉祉を城陽王に封じたのにつづいて、建武七年（三一）八月までに、前漢の諸侯王の子弟や光武帝の一族を諸侯王に封じている。しかし、統一達成の翌年にあたる建武一三年（三七）には一転して、それまでに諸侯王に封じていた長沙王劉興・真定王劉得・河間王劉邵・中山王劉茂を侯に、趙王劉良を趙公に、太原王劉章を齊公に、魯王劉興を魯公に降格している。⁽⁴⁾ 光武帝は自分の皇子も、建武一五年（三九）四月に、劉輔を右翊公に、劉英を楚公に、劉陽を東海公に、劉康を濟南公に、劉蒼を東平公に、劉延を淮陽公に、劉荊を山陽公に、劉衡を臨淮公に、劉焉を左翊公に、劉京を琅邪公に封じただけであり、諸侯王には封じていない（以上、建武五年までは『後漢書』光武帝紀上、建武六年以降は光武帝紀下）。この段階で一旦、後漢には諸侯王がいなくなったのである。⁽⁵⁾ としてあらためて建武一七年（四一）一〇月に皇子右翊公劉輔を中山王として常山郡を食ませ、他の皇子九人の公はもとの封地のままで爵を進めて諸侯王とされ、建武一九年（四三）閏四月には趙・齊・魯三国の公がともに諸侯王に進

められている（以上、光武帝紀下）。建武元年から、建武三年まで、諸侯王も郡国制も一応は存在したのであるが、それはあくまでも権宜の措置であり、正式には建武一七年一〇月に中山王劉輔らの封建を以て、後漢の諸侯王と郡国制が復活したとみるべきであろう。すなわち光武帝は、すでに更始元年の段階で郡の卒正・連率・大尹を太守にあらためるなどして、地方行政を前漢の制度にもどす方針をしめし、建武元年には諸侯王もおいっていたが、郡県と同姓の諸侯王国とが併存する前漢以来の地方行政体制は、建武一七年に正式に復活したということになる。

むすび

初始元年（八）に皇帝の位についた王莽は、始建国元年（九）以後、地方行政制度に関連して郡国制を廃止し、州あるいは監察の制度を複雑かつ重複するものにあらため、郡の太守を卒正・連率・大尹に、都尉を属令・属長に、県・道の令・長を宰にそれぞれ改変し、郡・県の境界を再区画し、郡・県の名称を変更するなど、多くの改革を行なった。とくに天鳳元年（一四）に全国の郡・県の境界を再区画して一二五郡、一二〇三県とし、三六〇の郡・県を「〇〇亭」と名づけ、さらに郡・県名を頻繁にかえたときには、県・道の現場がかなり混乱したことは疑いない。

しかし王莽の改革は地方行政よりも、中央官制、南北郊祀制や天子七廟制などをふくむ礼制、学校制度、土地制度、経済・財政政策、対外政策に重点がおかれており、地方行政においては中央に近い州・郡に改革の中心があり、県・

道に関する改革は少なかった。官制面では、州、郡、県・道の長官クラスの官名の改変は行なわれたが、それぞれの管掌事項・権限に変化があった形跡はなく、地方行政の実務を処理する郡・県の属吏をふくむ吏員組織にもほとんど手をつけていなかった模様である。郡・県それぞれと他の官府との関係をみると、中央と郡との間では、三公が郡を指導し、郡は三公に必要な事項を報告し、上計簿を上呈することになっており、軍事に関しては朝廷と郡の卒正・連率・大尹との間で虎符を割ちあっていた。郡と県・道との間では、郡の長官が行県を行ない、各種の指導にもあたっており、県・道は郡にむけて必要な事項を報告するほか、上計簿も提出していたと推測される。裁判はまず県・道で行ない、それで何かの問題が生ずれば、郡が関与することになっており、徴税については、郡はその方針の提示と監督にあたり、徴収の実務は県・道が担当していた。州牧は監察官として厳しく、また行政面で郡・県を監督する立場にあったが、地方行政を完全に掌握するほどではなかった。確認しえたかぎりでは、王莽期の地方行政のあり方は前漢後半期のそれと実質的に変わりなかったと理解してよさそうである。前漢末に任用された郡・県の長官クラスの多くが、王莽の帝位篡奪後もその地位を保持しているのは、地方行政のあり方があまりかわっていないことも関係するのであろう。なお、王莽の改革が地方よりも中央に、県・道よりも州・郡に、属吏組織よりも太守や令・長に重点がおかれていた背景として、王莽が外戚王氏の一族として京師で成長して地方をほとんど知らず、また実務を処理する行政官に就任した経験がなかったこと、王莽も他の王朝と同様に政權掌握直後から基礎固めをはかったが、そのために中央で改革をすすめる段階で諸改革が失敗して政治が混乱し、地方や実務の改革に目をむける余裕のないまま一五年で滅

亡してしまつたこと、という二つを考えることができる。

王莽の改革のうち、南北郊祀制や天子七廟制などの礼制に関する改革は後世に影響をあたえており、一応成功したといえるが、土地制度、経済・財政政策や対外政策などは失敗におわつてゐた。政治に関する改革も、王莽自身から公卿・尚書、さらに郡・県にいたるまで、ほぼ機能麻痺におちいる結果におわつてゐたといわざるをえない。とくに地方行政の場合、郡・県が反乱に適切に対応していないとか、郡大尹や県宰などが収賄その他で私財を蓄積しているとか、監察の使者が派遣されてくれば、地方長官はその接待にいそがしくて公務に取りくむ余裕がないといったことが指摘されている。

地皇四年（二三）に即位した更始帝は、曆法を王莽が使用してゐた殷正から漢時代の夏正にもどして更始元年と改元し、前漢を引きつぐ政権であることを表明した。地皇四年一〇月に王莽が殺され、世の帰趨がさだまらない中、更始帝をはじめとする群雄はできるだけ多くの郡を獲得しようとし、地方長官は帰属すべき群雄をさがしてゐた。その中であつて、更始帝は地名も官名も王莽期のものから前漢時代のものへもどす方針をとつてゐたらしい。劉秀も、更始元年一〇月、河北への遠征にむかう段階でいち早く郡の卒正・連率・大尹を太守に、県の宰を令・長にもどし、地方行政を前漢の制度にもどす方針を明確にし、それは、劉秀が建武元年（二五）に帝位についたのちに引きつがれていく。他方、王莽は基本的に諸侯王制・郡国制を廃止してゐたが、更始帝は更始二年に一九人の諸侯王を封じて郡国制を復活している。しかし一九人の諸侯王のうち一三人は異姓の諸侯王であり、厳密には前漢後半期の郡国制の復

活とはいいがたい。建武元年に即位した光武帝は建武一二年（三六）に統一を達成するが、その間に近親・疎族をとわず、宗族を必要に応じて諸侯王に封じてきた。しかし統一達成の翌年にあたる建武一三年には、それらの諸侯王を一旦公・侯に降格させ、あらためて建武一七年（四一）一〇月以後に皇子をはじめとする近親を諸侯王に封じ、ここに郡県と同姓の諸侯王国が併存する前漢以来の地方行政体制が正式に復活したのであった。

抜本的な改革がなかったとはいえ、王莽も地方行政に関連するそれなりの改革を行っていた。その中で後漢時代にひきつがれたものといえば、天鳳元年に天下の郡を内郡・近郡・辺郡の三種類に区分したこと、前漢時代の列侯制度には県侯一種類しかなかったが、王莽はそのほかに郷侯・亭侯の二種類をくわえたと考えられることくらいであろう。後漢におけるそのほかの地方行政制度は前漢後半期の制度を直接ひきついでいたことになる。

注

（１）王莽の人となり、政策、そして王莽期の歴史をとりあげた最近の業績として東晋次『王莽——儒家の理想に憑かれた男——』（白帝社、二〇〇三年）がある。以下の王莽の改革に関する記述では、その第六章「元后と共に」、第八章「宰衡の称号」、第十章「新王朝の諸政策」、第十二章「匈奴单于の怒り」を参照した。

（２）義和の設置およびその歴史的意味については、吉野賢一「前漢末における義和の設置について」（『九州大学東洋史論集』三一、二〇〇三年）参照。

- (3) 南北郊祀制、天子七廟制、明堂・辟雍・靈台については、注(1) 所掲の東晋次『王莽——儒家の理想に憑かれた男——』の第八章「宰衡の称号」のほかに、西嶋定生『秦漢帝国——中国古代帝国の興亡——』（一九七四年初出、講談社、一九九七年）の第六章「儒教の国教化と王莽政権の出現」、金子修一「漢代の郊祀と宗廟と明堂及び封禪」（一九八二年初出、金子著『古代中国と皇帝祭祀』、汲古書院、二〇〇一年）を参照した。
- (4) 初始元年には一二月がなかったから、一年が一一ヵ月でおわったことになる。
- (5) 六筭制の整備については、影山剛『王莽の賒貸法と六筭制およびその経済史的背景——漢代中国の法定金属貨幣・貨幣経済事情・高利貸付・兼并等をめぐる諸問題——』（私家版、一九九五年）の第三章「五均賒貸の着想・企画・制定と六筭制」参照。
- (6) 主なものとして、拙稿「前漢郡県統治制度の展開について——その基礎的考察——」（上・下）（『福岡大学人文論叢』一二—四、一四—一、一九八二年）、「前漢時代の郡・国の守・相の支配権の強化について」（『東洋史研究』四—一二、一九八二年）、「武帝の財政増収政策と郡・国・県」（『東洋史研究』四八—二、一九八九年）、「前漢後半期における中央政界と郡・国」（『福岡大学総合研究所報』一三六、一九九一年）などがある。
- (7) 拙稿「前漢時代における県の長吏の任用形態の変遷について」（『福岡大学人文論叢』一八一—、一九八六年）、「漢時代における長吏の任用形態の変遷について・再論」（『七隈史学』一一、二〇〇一年）、および「The Staffing Structure of Commandery Offices and County Offices and the Relationship between Commanderies and Counties in the Han Dynasty」（"ACTA ASIATICA" 58, 1990）など参照。
- (8) 拙稿「後漢時代における地方行政と三公制度」（『福岡大学人文論叢』三四—四、二〇〇三年）、「後漢時代における郡県政治の展開」（『响沫集』一一、二〇〇四年）参照。
- (9) 『漢書』卷九九王莽伝では、一二州の名称の改変は一年後の元始五年のことと記されており、公卿、二十七大夫や八十一元士の分掌のことは五年後の始建国元年の条にみえている。一二州の件は単純な繋年の相違の可能性がある。公卿、二十七大夫や

八十一元士については改革の内容に違いがあると推測されるが、『漢書』平帝紀の記述は具体性を欠いている。

(10) 前煇光という名称は居摂年間(六〇八)まで確認できる(『漢書』卷九二游俠・樓護伝)が、後承烈は分割の記事でしか確認できない。そして後述するように、始建国元年以降、京師地域をふくむ全国の郡を対象に大幅な改革が行なわれるし、一二州は始建国四年(一一二)に九州にあらためられている。

(11) 統義陽王の王臨と新遷王の王安は、封ぜられた翌地皇二年にいついで死去している。

(12) 『漢書』王莽伝には公・侯・伯・子・男の五等爵と附城がよくでてくるが、王莽期にも二十等爵があったことは、以下に引用する居延漢簡(旧・新簡)に上造・公乗がみえることによって確認できる。以下の木簡のうち、前者には居延の王莽期の名称である「居成」がみえ、後者には「始建国天鳳上戊六年」、すなわち天鳳六年(一九)がみえるから、ともに王莽期の木簡である。内容はいずれも単純な吏卒名籍であるので、釈文に読点をつけて引用するにとどめ、書き下し文は省略する。

居成(＝居延) 間田造昌里上造王

(四八二・一一)

甲渠塞百石士吏、居延安国里公乘馮匡、年卅二歳、始建国天鳳上戊六年

(EPT六八・四)

なお王莽期の居延漢簡については、旧簡を森鹿三「居延出土の王莽簡」(一九六三年初出、森著『東洋学研究 居延漢簡篇』、東洋史研究会、一九七五年)が、新簡を吉村昌之「居延新出の王莽簡について」(『史泉』七四、一九九一年)がそれぞれ集成しているほかに、李均明「簡牘所反映的王莽改制」(『秦漢史論叢』四、一九八九年)は、王莽期の居延漢簡・敦煌漢簡にみえる地名・官名を考証している。以下、居延旧簡・居延新簡から王莽期の事例を引用するさいには、森鹿三・吉村昌之両氏の集成を参照している。

(13) 原文には「河南」とあるが、河南郡についてはこの後に特別に「河南大尹を更名して保忠信卿と曰ふ」と記されている。ここでは王先謙の『漢書補注』所引の劉奉世の説にしたがって、「滎陽」とあらためた。

(14) 後漢時代に内郡・近郡・辺郡の三区分法が用いられていたことは、拙稿「前漢後半期における郡・国への規制の強化」(『古

代文化』四二一七、一九九〇年）の注（４）で指摘した。

- （15）三公士は、『漢書』王莽伝中の天鳳元年の条に、大司空士が夜間に奉常亭の亭長とトラブルをおこしたとあるのが初見である。『漢漢』王莽伝下の地皇二年の条には、上告をうけて派遣され、予州で調査にあたっていた大司馬士が賊にとらえられたとある。三公士が派遣されていることから考えて、これは単なる民間の案件ではなく、官吏が関係した案件とみるべきであろう。このことを考慮するとき、執法左右刺姦と任務にあたった三公士も監察の任の一端をになっていたといえよう。

この三公士の設置について、『後漢書』伝二彭寵列伝の、彭寵が地皇年間（二〇～二二）に大司空士となったという記事の李賢注に、「王莽の時、九卿は三公に分属し、一卿ごとに元士三人を置く」とある。この注は、『漢書』王莽伝中の始建国元年の条に中央官の改革を記して、「【九卿は】三公に分属し、一卿ごとに大夫三人を置き、一大夫に元士三人を置く。凡そ二十七大夫、八十一元士」とある記事を誤って引用したものであろう。それはともかく、三公のものと卿ごとに三人の大夫がおかれ、その大夫ごとに三人おかれた元士を三公士とみなす李賢の理解が正しいのかどうか、いささかの疑問がのこる。ここでは三公士がいつ、どのような形で設置されたのか、不明としておく。

- （16）王莽期の貨幣制度および郡の分鑄については、注（5）所掲の影山剛『王莽の賒貸法と六筭制およびその経済史的背景』のII章「王莽政権初期の貨幣政策・制度の変遷と漢書の食貨志下の記述」、とくに九三頁以降参照。

- （17）『漢書』王莽伝下によると、天鳳四年六月に王莽はあらためて諸侯に明堂で茅土をさずけて封邑を賜与すると明言しているが、またもや封君は封邑などをほとんど賜与されなかったという。こうした事実を前提に考えると、天鳳元年、郡の太守・都尉の官制を改革したときに、公爵の人物を州牧に、侯爵を卒正、伯爵を連率、子爵を属令、男爵を属長にそれぞれ任用し、その官を世襲させたところのは、五等爵の諸侯に封邑をあたえられないことに対する代替措置とみることができよう。ただし爵位による地方長官任用が世襲であったのかどうか、疑問がのこることについてはさきにのべた。

- （18）注（1）所掲の東晋次『王莽——儒家の理想に憑かれた男——』第十一章は、「五等爵制による封建制と郡県制との関係」に

ついて、明確でないところがあるとのべている。

- (19) 林劍鳴『秦漢史』(上海人民出版社、二〇〇三年) 六四二頁参照。なお、林劍鳴氏が「侯国・附城二千五百零七」としているのは「二千三百零七」の誤植であろう。

- (20) 注(7) 所掲の拙稿「漢時代における長吏の任用形態の変遷について・再論」第三節参照。

- (21) たとえば、『漢書』王莽伝中の始建国四年の条に「牂柯大尹周歆」・「遼西大尹田譚」、王莽伝下の更始元年初の条に「安定卒正王旬」、『後漢書』伝九耿弇列伝に「朔調(Ⅱ上谷)連率耿況」、『後漢書』伝「李憲列伝」に「廬江属令」李憲、『後漢書』伝「李忠列伝」に「新博(Ⅱ信都)属長」李忠などがみえる。

- (22) 林梅村・李均明『疏勒河流域出土漢簡』(文物出版社、一九八四年) 参照。以下、疏勒河流域出土漢簡の引用と、「疏三五七」などの簡番号はすべてこの書による。なお、文德という郡名は『漢書』地理志にみえないが、王国維はシャバンヌにしたがって、王莽は敦煌郡をまず文德郡と改称し、のちに敦德郡にあらためたとみている。王国維「屯戍叢残考釈」(羅振玉『流沙墜簡』所収)、大庭脩『大英図書館藏 敦煌漢簡』(同朋舎、一九九〇年) 八七頁参照。

- (23) 呉式芬『封泥攷略』卷八参照。ちなみに王莽期の官印・封泥については、呉榮曾「新莽郡県官印考略」(一九八九年初出、呉著『先秦兩漢史研究』、中華書局、一九九五年) が考察している。なお、「予章南昌連率」は、南昌県に治所をおく予章郡の連率という意味であろう。郡の長官のこうした表記は、後引の虎符でもみることができる。

- (24) 前漢時代、異民族の侵寇にさらされる辺郡には哨戒組織がおかれており、永田英正「簡牘よりみたる漢代辺郡の統治組織」(一九八〇年初出、永田著『居延漢簡の研究』、同朋舎、一九八九年) に詳しい。王莽期にも、都尉(大尉)のもとに「張掖城司馬」(居延旧簡：二八八・三〇)、「千人」(敦煌漢簡：疏三四八) が、候官には「敦德(Ⅱ敦煌)歩広曲候」・「西海(Ⅱ金城)沙塞右尉」(以上、羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』第四卷) が、部(候)には「不侵候長」(居延新簡：EPT五九・五六)、「部吏」(居延旧簡：九五・一二) が、燧には「燧長」(居延旧簡：二三一・一〇六) が、それぞれ確認される。民政を中心とす

る地方行政を検討している本稿では、哨戒組織にはこれ以上言及しないが、ここでのべたように、王莽期の哨戒組織の官名も基本的に前漢と同じである。

- (25) 甘肅省博物館・敦煌県文化館「敦煌馬圈湾漢代烽燧遺址発掘簡報」(一九八一年初出、甘肅省文物工作隊・甘肅省博物館編『漢簡研究文集』、甘肅人民出版社、一九八四年)五〇八頁参照。

- (26) たとえば、『漢書』王莽伝下の更始元年初の条に、南陽郡析県の鄧曄・于匡が反乱をおこしたとき、析県宰は数千の兵を将いて武関で備えたとあり、『後漢書』伝六九儒林上・欧陽歙列伝には、王莽期に欧陽歙が潁川郡の長社宰になったとみえる。

- (27) 注(23) 所掲の呉榮曾「新莽郡県官印考略」は、王莽期の官印に「號県馬丞印」・「封丘徒丞印」・「阿陵空丞印」(以上、羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』巻四)のように、馬丞・徒丞・空丞が数多くみえることと、三公の大司馬・大司徒・大司空の職務分担ともとづいて、県・道の丞・尉は、民事をつかさどる丞が徒丞に、前漢時代の(大きな)県・道に二人いた尉のうち一人が武事をつかさどる馬丞、もう一人が水土の工事をつかさどる空丞に再編成されたと推測した。検討してみるべき見解であるが、これら馬丞・徒丞・空丞は官印にはみえるものの、現在のところ文献史料・簡牘類・封泥においてその存在を明確に確認することができない。その一方で、本文で紹介したように、王莽期の県・道には「居延丞」・「居成尉」が存在していた。今は馬丞・徒丞・空丞については注記するにとどめておく。

- (28) 以上のはかに、羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』巻三が前漢の官印としてあげている「南執姦印」・「石泉右執姦」・「木禾右執姦」・「梃泉左執姦」などの執姦を、注(23) 所掲の呉榮曾「新莽郡県官印考略」は王莽期の官印とみなし、またいずれも半通印であるがゆえに、県・道の属吏であり、治安関係をつかさどっていたと理解している。

- (29) 注(6) 所掲の拙稿「前漢後半期における中央政界と郡・国」参照。

- (30) 注(8) 所掲の拙稿「後漢時代における地方行政と三公制度」参照。

- (31) 王莽期の翼平という郡名は『漢書』巻二八地理志にみえないが、北海郡寿光県の条に「莽は翼平亭と曰ふ」とあるから、前

漢の北海郡寿光県の地を中心とする地域を翼平郡といったのであろう。

- (32) この資料の存在は、注(23) 所掲の呉榮曾「新莽郡県官印考略」によって知った。虎符の銘文の訓読と解釈は、大庭脩「居延出土の詔書断簡」第二節「文帝の詔と銅虎符・竹使符」(一九六九年初出、大庭著『秦漢法制史の研究』、創文社、一九八二年)を参照している。

- (33) 注(7) 所掲の拙稿“The Staffing Structure of Commandery Offices and County Offices and the Relationship between Commanderies and Counties in the Han Dynasty”参照。

- (34) 始建国元年秋のこの記事より早い同年春の条に、官名改変や諸侯王制の廃止の記事がある。したがって『漢書』王莽伝の「王侯以下」をここでは「諸侯以下」と解釈した。

- (35) 劉邦は漢王元年(前二〇六)に漢王となり、高祖五年(前二〇二)に皇帝となって(高祖)のち異姓諸侯王の排除に取りかかり、高祖十二年(前一九五)に淮南王英布を誅して異姓諸侯王をほぼ平定するまで十二年を要している。劉秀も建武元年(後二五)に帝位について(光武帝)から、建武十二年(二六)に蜀の公孫述政權をほろぼすまで十二年かかっている。

- (36) 景帝の子、長沙定王劉発の子である安衆康侯劉丹の子孫。安衆侯国は南陽郡にある。

- (37) 注(1) 所掲の東晋次『王莽——儒家の理想に憑かれた男——』の第十三章「諸政策の破綻」参照。

- (38) 江幡真一郎「後漢末の農村の崩壊と宦官の害民について」(『集刊東洋学』二二、一九六九年)参照。

- (39) 注(7) 所掲の拙稿「前漢時代における県の長吏の任用形態の変遷について」、「漢時代における長吏の任用形態の変遷について・再論」“The Staffing Structure of Commandery Offices and County Offices and the Relationship between Commanderies and Counties in the Han Dynasty”参照。

- (40) 和帝が親政をはじめた永元四年(九二)から、鄧太后臨朝がおわる安帝の建光元年(一二)まで、地方行政刷新策がだされてきたことについては、上谷浩一「後漢中期の地方行政刷新とその背景——後漢殤帝『延平元年の詔』とその周辺——」

『東洋学報』七五—二・四、一九九四年）があり、筆者も注（8）所掲の拙稿「後漢時代における地方行政と三公制度」などで言及した。

（41）注（12）所掲の吉村昌之「居延新出の王莽簡について」は、隗囂の支配下にあった隴西地方における殷正から夏正への変更、すなわち地皇から新しい元号への変更は、王莽の死がつたえられたあとのことで、「新始建国地皇上戊三（四）年十一月」のつぎに「復漢元年十一月」（「復漢」は隗囂の元号で、更始と同様に元年は西暦二三年）をおいて、すなわち一月を二回おくかたちで実施されたことを、居延新簡によって明らかにしている。王莽が即位した初始元年は夏正から殷正にかわる前の年であり、注（4）でみたように一—カ月しかなかったが、夏正が採用された更始元年は一—三カ月あり、相殺されている。

（42）部監は天鳳元年におかれた五郡をつかさどる監察官である。曹は、『漢書』卷二八地理志上の済陰郡の条に「定陶（故の曹国）」とある。済陰郡定陶県を中心とする五郡につけられた部の名前であろうか。

（43）『後漢書』岑彭列伝は、七郡・国を荊州刺史部の五郡・国と交州刺史部の二郡と明記しているが、『後漢書』光武帝紀下の建武五年—二月の条の李賢注は、機械的に交州刺史部の七郡にあてはめている。

（44）長沙王劉興らが侯に降格されたのは、『後漢書』光武帝紀下の李賢注に「其の服属（＝喪に服すべき親縁関係）既に疏にして、当に爵を襲ひて王と為るべからざるを以てなり」とあるように、光武帝との親縁関係が遠いたためである。しかし長沙王劉興が光武帝とどういう関係にあるのか、『後漢書』には何ら説明がない。ここで『漢書』卷一四諸侯王表をみると、景帝の子の長沙定王発の子孫の舜が、王莽が篡奪したときに公に降格され、翌年に廃されたことある。その前後をみると、同じく景帝の子の常山憲王舜の子の平が真定王に紹封され、その子孫の楊が王莽の時に降格されて公とされ、河間献王徳の子孫の尚、中山靖王勝の子孫の広平王漢が、いずれも公に降格され、翌年に廃されている。このうち、もとの「真定王楊」は『後漢書』光武帝紀上の建武二年五月の条によって真定王劉得の父とわかる。長沙王劉興・河間王劉邵・中山王劉茂も王莽に廃された諸侯王の子弟とみてよからう。光武帝も長沙定王発の子孫であるから、同じく景帝の子孫ということで諸侯王に封じたものの、親縁関係が

遠い疎族ということ、方針をかえたのであろう。他方、趙公・齊公・魯公に降格された三人は光武帝の叔父と兄の子という近親である。

なお、長沙王劉興がいつ長沙王になったのか記録はないが、前記の通り、建武五年（二九）一二月に交阯牧鄧讓にひきいられて貢献してきた七郡・国の守・相の中に長沙相韓福がみえた。この長沙相は長沙王劉興の相である可能性が高い。そうすると、長沙王劉興は光武帝に帰属する前に何らかの事情で王位についており、貢献・帰属したのちに光武帝からあらためて長沙王に封ぜられたということになる。

(45) 『後漢書』光武帝紀下、『後漢書』伝二盧芳列伝によると、後漢初期に五原・雲中郡地方に勢力をはっていた盧芳が、建武一六年（四〇）に光武帝にくだってきて代王に封ぜられ、匈奴の安集にあたっている。建武一六年の段階では唯一の諸侯王であろう。しかし光武帝は、代王盧芳に明年正月に入朝するように命じておきながら、盧芳が入朝のために出発すると、直後にその次年にあらためて入朝するように命じるなど、かなり冷たく対応している。光武帝にとって意にそわない諸侯王であったのであろう。ついに盧芳は建武一八年（四二）五月に反して匈奴に逃亡している。

